

所謂石津本新古今和歌集に就いて

小島, 吉雄

<https://doi.org/10.15017/2557092>

出版情報 : 文学研究. 8, pp.69-79, 1934-05-15. 九州文学會
バージョン :
権利関係 :



所謂石津本新古今和歌集に就いて

小 島 吉 雄

願れば昭和七年春の頃であつた。同學、笹淵友一君が、訪書旅行中に傳藤原基綱筆本新古今和歌集を見た、と報告して呉れた。わたくしは、早速一見したい希望はあつたが、他の用事に妨げられて、久しくその望みを果さずにゐた。その後、機會を得て、その書の所藏者に會ひ、その書を一見するに及んで、その被切出たる歌が、前田家本新古今和歌集の解説に引用せられてゐる「石津本」なるものに殆ど一致してゐることを知つた。幸ひにして、所藏者石津氏の好意によつて、これをわが研究室に借用して、詳細調査の便宜を得たのである。

ところが、わたくしには、どうしてもこの借用の本

が、前田家本解説中の所謂石津本と同じものであるやうな氣がしてならない。そこで、念の爲め、該解説の執筆者たる東大の池田龜鑑氏に照會したところ、池田氏は多忙中にもかかはらず更に石津本の發見者松田武夫氏にお問ひ合せ下されて、御鄭重な御返事に接することが出来た。わたくしは、それに依つて、わたくしの推定が的中してゐて、今わたくしの手もとにある新古今和歌集は全く前田家本解説中の石津本そのものに他ならぬことを知り得たのである。

實は、昭和五・六年の交、松田武夫氏は、此の書を二度にわたつて詳細に調査せられ、手控を作つておかれた

のである。前田家本解説の記事は此の手控をもとにして出来たのだといふ。従つて、此の書發見の功勞は一に松田氏の御骨折りに歸すべきもののやうである。ただ、わたくしは、此の書借觀の際、所藏者のために、此の書の解説を執筆すべき事を約束した。その約を果すために、今その任たらざることを知りつつ、此の一文を草するのである。

石津本新古今和歌集は、縦八寸三分八厘、横五寸六分、薄篠鳥の子の大和綴の上下二冊本。表紙は代赫色の地に金銀箔の模様が入つてゐる美麗なもので、春日政治教授に伺へば、この種の用紙は南北朝以前の經卷の料紙に屢用ゐられてゐるさうで、甚だ大時代のものであるが、その本文の書寫年代は比較的新しく、室町時代のものと推定せられる。表紙の題簽は朱色で、これの筆者は三條西實隆、本文の筆者は姉小路基綱卿だといふ古筆琴山の極めがあるが、眞疑のほどは私には分らない。

上册は、第二葉は白紙で、以下墨付の部分が百四十九葉、最初に漢序があり、次に和序があり、さて、それから本文に入り、卷第一より卷第十までを收載してゐる。下冊は同じく第一葉白紙、墨付百三十四葉、卷第十一より卷第二十に至り、その次に次の如き奥書がある。

(第百三十三葉目裏)

承元三年六月十九日書之

同七月廿二日依重 敕定被改直之

(第百三十四葉目裏)

以相傳秘本祖父卿眞筆書寫校合之了

正安二年黃鐘下旬

右兵衛督 爲相

(第百三十五葉目ウラ)

以此秘本書寫比較畢

應永十三年九月十五日

去六日始立筆今日

午一點終功畢

福照院關白

内大臣

此の奥書を解釋すれば、承元三年の藤原定家筆寫の本を冷泉爲相が、正安二年十一月下旬に書寫校合したのを、應永十三年九月十五日に二條滿基が書き寫し、それを更に誰れかが轉寫したことになるのである。二條滿基は、應永十年八月から全十六年三月まで内大臣だつた人である。

本文は大體、一面十行の割で、歌は一行に書きしるされてゐる。

此の石津本の價值は、相當重要なものであるが、前田家本解説にもあるとほり、冷泉家傳本の體裁の知られることと、現在知られてゐる傳本中、所收歌數の一番多い點とが結局、われわれ研究者にはありがたいのである。

所謂石津本新古今和歌集に就て

一體、新古今集の傳本には、選進の際の選者名あるものと無いものがある。また、新古今集は一旦撰定のちの後鳥羽院の勸慮によつて盛んに歌の切出し切入れが行はれてゐるから、従つてその切出し切入れの歌を註記してゐるものと、してゐないものがある。また、後鳥羽院が隱岐で御撰抄遊ばされた所謂隱岐本の面影を傳へてゐるものと傳へてゐぬものがある。石津本には、選者名がなく、また、隱岐本の面影は残つてゐない。ただ切出された歌の註記がある。

切出された歌の註記のある傳本には二種類ある。甲は、切出された歌も本文の中に入つてゐて、そして、それに傍註を附してゐるものである。乙は、切出された歌は本文中にはなくて、本文の終りに別に奥書として、切出された歌だけを列記し別註してゐるものである。石津本は此の二種類中の甲類に屬するものである。此の甲類に屬するものには、佐々木信綱博士藏中山家舊藏本、柳

瀨氏藏隱岐本、圖書寮烏丸光榮本、前田家藏爲親本、久原文庫藏古寫本（零本）、圖書寮鷹司本、等がある。

今、石津本も亦此處に加ふべきである。乙類に屬するものも、佐々木信綱博士藏甘露寺親長本、圖書寮姉小路基綱本、同じく近代寫一本、等その數尠くない。尤も、切出された註記のないものでも、所謂被切出歌を含むものがある。吉澤博士藏永祿三年寫本（零本）、高野山傳來姉小路基綱染筆本、等がこれである。（註記、此の種のもものは、室町から近世初期にかけての寫本に澤山あるところで、久原文庫藏天正古寫本がその一である。その他最近書肆の目録に見えたもので此の部に屬するものが多
い。）

右にあげた寫本中、石津本のやうに、選者名もなく、隱岐本の記號もないものは、佐々木博士藏親長本と、高野山傳來の基綱本とであつて、佐々木博士藏中山家本、柳瀨氏隱岐本、圖書寮鷹司本（上冊ダケ）は選者名と隱

岐本の記號とを併せ有してをり、圖書寮烏丸光榮本、同永祿七年寫本（上冊ダケ）は選者名をしるしてをつて、隱岐本の記號はその一部分にだけ存してゐるものであり、前田家藏爲親本、吉澤博士藏永祿三年寫本（卷十一以後）は、選者名だけをしるしてあり、久原文庫藏古寫本（卷十マデ）は選者名は卷第一の初めの部分にだけしるしてゐるのみであるが、隱岐本の面影を傳へてをる。

なほ、序でに申せば、圖書寮所藏の一寫本に隱岐で選ばれた歌だけをしるした新古今集があり、所謂純粹の隱岐本の體裁を示してゐる。近代寫本であり、卷十までの零本である。合點本などと比較すると、大體に於て一致してをり、二三相違する箇所がある。研究家の一參考書にはなるだらう。

却說、新古今集は元久二年三月下旬に大體完成したので所謂成立祝の竟宴を行はれたが、まだ精撰せられたものでなかつたから、その後、引續いて、改訂を加へられ

てをる。切出しとか切入れとかいふのは、此の改訂事業の現象である。既に入集してゐる歌を除いたり、新しく秀歌を入集したりするのをいふのである。この改訂のことは、いつ頃まで続いたか分らぬが、今日では、源家長本の奥書によつて、建保四年十二月には、兎も角、此の改訂事業が一段落ついたと推測せられてをるのである。

元久二年以來、この建保四年までの間に、歌の出入が多いから、従つて、新古今集傳本には、筆寫の際の條件如何によつて、歌數が一定せず、或は前記のやうに除棄せられた歌を數多く含むものもあり、或は全く除棄の歌を含まぬものもあり、その一部分を含むものもあるなどといふことになつたのである。今、現今知られてゐるもので、流布の刊本を基本にして諸本に出入りのある歌を一覽表にして掲げると次の如くなる。

表中の略號説明。——烏、(圖書寮烏丸光榮本)、柳

(柳瀬氏藏隱岐本)、前(前田家藏爲親本)、吉(吉

所謂石津本新古今和歌集に就て

澤博士藏永祿三年寫本)、姉(高野山傳來姉小路基綱筆本)、石(石津本新古今和歌集)、久(久原文庫藏古寫本)歌の上に○印のあるは、石津本所載歌。

1、流布本ニナキ歌

卷二 春下

【一〇「春雨は」ト一一「花の香に」ノ間ニ】

中納言家持

○ふるさとに花はちりつつみよしの山のさくら

はまださかずけり(一) (烏、柳、久、前、姉、

久原文正寫本、石)(二) 結句、久原古寫本、久原

天正本、姉小路本ハさかずけり、柳瀬本ハさかぬなり、烏丸本ハさかずなり、石津本ト姉小路本傍註トハ盛りなり。

【二四六「をしめども」ト一四七「よし野山」トノ間ニ】

太神宮に百首歌たてまつり侍し中に

太上天皇

○いかにせむ世にふるながめしはの戸にうつろふ

花の春のくれがた(鳥、久、前、姉、石)

【二六二】あしびきの「ト一六三」かくてこそ「ノ間ニ」

題不知

赤人

戀しくはかたみにせよとわがやどにうゑし藤な
みいまさかりなり(姉)

卷三 夏

【二二二】ありあけの「ト二二三」すぎにけり「ノ間ニ」

顯昭法師

○ほととぎすむかしをかけてしのべとや老のねさ
めに一聲ぞする(三)(鳥、前、石)(三)柳瀬本二

○九「ありあけの」ト二二〇「我心」トノ間ニアリ、
被出了ノ註ナシ。

【三七】五月雨の「ト二三八」たれかまた「トノ間ニ」

題しらす

赤染衛門

○さみだれの空だにすめる月影になみたの雨はは
るるまもなし(三)(鳥、前、姉、石)(三)柳瀬本

卷四 秋上

ハコノ歌、二二六「小山田に」ノ次ニアリ。

【二四四】はささぎす「ト二四五」たちはなの「トノ間ニ」

増基法師

○ほととぎす花たちはなの香はかりになくやむか
しの名残なるらん(四)(鳥、前、石)(四)コノ

歌、柳、久、姉、ニハ、二七四「夕ぐれは」ノ次ニア
リテ、詞書アリ。

【二九八】昨日まで「ト二九九」おしなべて「トノ間ニ」

太神宮に奉りし秋歌(五)の中に

太上天皇

○朝つゆのをかのかや原山風にみだれてものは秋
ぞかなしき(鳥、前、石)(五)鳥丸本ニハ五首歌

中にトアリ。

【三四】この夕「ト三五」年をへて「ノ間ニ」

家に七夕の心をよみ侍ける(六)

宇治前關白太政大臣

○契けむほどはしらねどたなはたのたえせぬけふ
のあまのかはかせ^(七) (鳥、久、石) ^(八) 此ノ詞

書ハ久原古寫本ニヨル。鳥丸本ハコノ詞書ナク、流布
本「三二五」權大納言長家歌ノ詞書ヲ此ノ歌ノ詞書ト
シ、長家ノ歌ニハ詞書ヲ闕ク。^(七) 石津本ニハ此ノ
歌、詞書ナク、「三二五」長家ノ歌ノ次ニ出ヅ。ナ
ホ、入金葉之由雅經朝臣申之ノ註記アリ。

卷五 秋下

【四四一「妻さふる」ト四四二「み山べの」トノ間ニ】

○たかまとの^(八) 尾の上にたてる鹿の音にことの
ほかにもぬるる袖かな (鳥、石) ^(九) 初句、石

津本ニハたかさこのトアリ。

【五四四「立田姫」ト五四五「行く秋の」トノ間ニ】

前大僧正慈圓

立田山秋ゆく人の袖をみよ木々のこすゑはしぐ

れざりけり (柳)

卷八 哀傷

所謂石津本新古今和歌集に就て

【八一三「うしとては」ト八一四「はかなし」トノ間ニ】
題しらす

○たれなりと^(九) おくれさきだつほどあらば形見
にしのべ水葦のあと^(十) (鳥、姉、石)

^(九) 初句、鳥丸本ニハたれなれとアリ。^(十) 鳥丸本
ニハ被留了ノ註アレドモ石津本ニハナシ。柳瀬本ニハ
コノ歌、離別部ニ出ヅ。

【八一四「ふるさきに」ト八一五「玉の緒の」トノ間ニ】

醍醐の御門かくれ給ひてのころ人のもとに
つかはしける 盛明親王

○世の中のはかなきことを見る比はねなくに夢の
ここちこそすれ^(十一) (鳥、柳、石) ^(十二) 鳥丸本ニ
ノミ被留了ノ註記アリ。

卷十 羈旅

【九〇四「するがなる」ト九〇五「くさ枕」トノ間ニ】

延喜御時屏風歌

躬 恒

○浪のうへにほのに見えつつ行く舟は浦ふく風の

しるべなりけり(鳥、柳、石)

【九一「神風の」ト九二「ふるさとの」トノ間ニ】

西宮左大臣家屏風にしかの山をかきたる所

をよめる

源 順

名をきけば昔ながらの山なれどしぐるる秋ぞ色
かはりゆく(姉)

卷十六 雜上

【一四七四「おぼつか」ト一四七五「よをいさふ」
トノ間ニ】

除目ののち、かりのなきけるをききてよめ
る 躬 恒

○宮にて春をたにやはすくしえぬいつちか雁の
なきて行くらむ(十三)(石)(十三石津本ニハ被出了ト

註アリ。

卷十七 雜中

【一六〇三「いまさら」ト一六〇四「おほよさの」

トノ間ニ】

題しらず

紀貫之

○いくよへし入江(十三)の松ぞむかしより立よる波
の数はしるらむ(十四)(柳、石、)(十三第二句、石
津本ニハ磯への松を(十四)石津本、入拾遺とや權中納言
源朝臣申之ト註アリ、柳瀬本、無註

卷十八 雜下

【一八四五「ゆくすゑは」ト一八四六「世の中を」ト
ノ間ニ】

題しらず

西行法師

○ねかはくは花の下にて春しなむそのきさらきの
もち月の比(十五)(石)(十五石津本、被出了ノ註アリ。

卷二十 釋教歌

【一九七五「けふはいささ」ト一九七六「西へゆく」
トノ間ニ】

依釋迦遺教念彌陀といふ心を

肥 後 (ナカ)

○おしへおきていりにし月のなかりせば西にここ

ろをいかてかけまし (ナカ) (石、吉、) (ナカ) コノ詞

書及ビ作者名ハ吉澤本ニハ無ク、「一九七六」待賢門
院堀川ノ歌ノ詞書ト作者名トノ次ニ歌ダケヲ載セタ
リ、依リテ、コノ歌ハ待賢門院堀川ノ歌トナリヲレ
リ。(ナカ)石津本、被出了ノ註アリ。

2、流布刊本ニアリテ古寫本類ニ闕クルコトノ

アル歌

卷十八 雜下

【二七九三】 太神宮の歌合に 太上天皇

大空に契るおもひの年もへぬ月日もうけよ行末
のそら (姉アリ、他本ナシ)

【二八〇一】 題しらず 大中臣能宣朝臣

○水莖のなかに残れる瀧の聲 (ナカ) いとしも寒き秋
の聲 (ナカ) かな (ナカ) (石アリ、他本ナシ) (ナカ) 石津

所謂石津本新古今和歌集に就て

本、上三句、みづぐきの跡に残れる玉のころ。(ナカ) 第

五句、石津本、秋のかせかな。(ナカ) 石津本、被出了ト

アリ。

卷十九 神祇歌

【二九一四】 奉幣使にて佳吉にまゐりて昔住み
けるところのあれたりけるをみてよみ侍ける

(ナカ)

津守有基

○住みよしと思ひし宿は荒れにけり神のしるしを
まつとせしまに (石アリ、他本ナシ)

(ナカ) コノ詞書ハ石津本ノニ從フ。

(註、スベテ歌ノ番號ハ國歌大觀本ノソレデアル)

右の表の歌の範圍内で新古今集の諸傳本の所收歌に増
減があるわけであるが、此のうち石津本にのみあつて他
本に全然見えない歌が二首、また他本にありて石津本に
は全くない歌が四首、しかしながら、全體としてみると
きには、前表でも明かなやうに、石津本は今日知られて

ゐる傳本中、その歌數の最も多きものであり、最も多く切繼歌を含むものといふことが出来る。且つ、また切出された歌には、他本には見えない註記もあつて、新古今集の切繼歌の研究には最も貴重な資料を提供するものと言はねばならぬ。

此れを切繼歌を收録してゐる他の諸傳本と比較校合してみに、その本文の排列及び歌詞の異同は、柳瀬氏隱岐本に最も遠く、圖書寮烏丸光榮本に最も近きものといふことが出来る。烏丸本に次いで、前田家藏爲親筆本と高野山傳來姉小路基綱筆本に多くの共通點をもつてゐる。殊に高野山傳來本とは歌詞本文の相一致する點が多い。しかし、烏丸本よりも切繼歌が卷十一以後に於て七首も多いし、前田家本や高野山傳來本よりも、前者では十三首、後者では九首も多いのである。なるほど高野山傳來本には、石津本にない歌三首（春下「戀しくはかたみにせよと」の赤人歌、羈旅の「名をきけば昔ながら

の」の源順歌、及び雜下の「大空に契るおもひの」の太上天皇の御製。就中、前二首は他の傳本にもなく此の書にだけあるものである）がある點で尊重せらるべきであるが、卷四秋上の部に於て八首にわたり脱落があるのみならず、本文の上にも誤寫と思はれるものが尠からずあつて、善本とはいへない。前田家本にも、その解説中に指摘してゐる如く、落丁、誤脱がある。これらから見ると、この石津本は、少しもさやうな誤脱や落丁がなく、またその本文も誤寫と認むべきものが比較的尠ない。もつとも數ヶ所明かに誤寫と認むべきものはあるが、他方また、この書によつて、讀み正さるべき箇所もあるので、圖書寮の合點本や永祿七年寫本、烏丸本、久原古寫本などとともに先づは善本の部類に入れてよろしきものである。況して、家長本以前の、切出歌の存してゐる新古今集のありのままの姿を最もよく傳へてゐるのであるから、此の書は一層學術的に貴重なるを思ふのである。

旅行を前に控へての忽卒の執筆ではあり、充分なことを述べ得ずして擱筆することを心苦しく思ふが、前田家本解説中の文章の補足として読んでいただければ幸甚である。

最後に、本解説執筆に便宜を賜はつた原所藏者石津一六氏並に、池田龜鑑、松田武夫の諸氏に厚く御禮を申し上げます。おきたい。